

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	2470501293		
法人名	有限会社 レモンの里		
事業所名	グループホーム・ レモンの里		
所在地	三重県津市神納418-1		
自己評価作成日	28年3月1日	評価結果市町村提出日	

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://www.kaijokensaku.jp/24/index.php?action_kouhou_detail_2015_022_kani=true&JigyosvoCd=2470501293-00&PrefCd=24&VersionCd=022
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	BERシステムズ株式会社
所在地	四日市市八王子町439-1
訪問調査日	平成28年3月14日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

『健康とオープン』を基本理念とした、自由で豊かな暮らしの実現。 外出をすることが元気の源と考えて、旅行・外出を積極的に支援。 利用者も・家族も・職員も、介護の既成概念にとらわれない暮らし。 各人が自分の力を発揮し、ごく普通に自宅同様の暮らし。
--

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

利用者は「普通の生活」が大切であるとの考えで、家族としての交流・介護が行われている。利用者が若い時に過ごしてきた生活空間を大切にするために、玄関には古いカメラやグラスなどが、また、共用居間には古い電車のプレートや大きな提灯など古き良き時代を復古させるよう工夫されている。 自分らしく、自由に楽しく暮らすためには健康である事が一番であり、食事が健康の源であることから、おやつや食事は好きな物を好きなだけ食べられるようにと、利用者の希望を聞きながら、せんべいや串団子や骨付きの魚などをゆっくりと時間をかけながら食べることで、誤嚥等することなく全員が普通食を食べられるようになっている。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印
56 職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○ 1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんど掴んでいない	63 職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○ 1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57 利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○ 1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64 通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○ 1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58 利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65 運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○ 1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59 利用者は、職員が支援することで生き生きした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66 職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	○ 1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60 利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67 職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61 利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68 職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62 利用者は、その時々々の状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らさせている (参考項目:28)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない		

自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー) + (Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	基本的な理念の根幹は創業時と変わりない。現実には高齢化が進行し、身体介護のウェイトが多くなり、自立が難しくなっているが、理念に沿った実践を目指している。	利用者・職員共に健康であるためにどうすれば良いか、オープンであるためにはどうすれば良いかを、全職員自らが考えて積極的に行動し、管理者と職員は支援が理念に沿っているかを話し合う機会を設けている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	神輿の奉迎などを通じ、神社の祭礼・越年行事に参加。(利用者・職員) 認知症カフェの取組を行っている。地区自治会長として啓蒙活動(AED設置・講習会など) ガーデンを開放し近隣の方々の来訪を得ている。	ガーデンは地域の人々の集いの場となっている。他の事業所の利用者も来園し利用者同士の交流も行っている。庭にはいろいろな果樹等があり、この収穫時にはお世話になった人々や、利用者家族などの顔見知りの人々を招待しての交流がある。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	実践状況を各種講演会などで知らせている。 老人会・三重短大・地区の行事など。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	推進会議は、レモンの里のホールで行い、入居者も参加し、感想を述べてもらったりしながら写真や動画を見て、実際のありさまを報告・話し合っている。	運営推進会議を前向きな施策の方向性を見定める指針作りの場としており、共同ホールで実施する事で利用者も参加し、新しい取り組みの報告や、協力依頼の場としてサービス向上に寄与している。	推進会議は事前に会議参加者に意見を求めるような会議の招集方法の工夫など、更なる意見聴取での活用に努められることを期待する。
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	三重短大等で講演・学生の見学・実習を受け入れ。三重大学ゼミの見学受け入れ。県社協の職場体験受け入れ。津市介護保険課職員が推進会議参加。地域包括職員との交流も図っている。	学生の学習の場となるように、見学・実習の受け入れが積極的である。三重県職員、県社協、地域包括の現場学習(現場体験)の受け入れも行っている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	扉は無施錠。ガーデンにフェンスもない。日課の自由。 利用者が自由に行動している。職員が個々に意見を出し、職員同士で検討会を行っている。	決まったスケジュールは無く、利用者は思うままに生活している。来訪者も自由に利用者の部屋に出入りできる。施錠は入居者と職員の信頼関係を失わせるもとであると家族・職員間で理解し、拘束に当たる言葉などについての検討会も職員間で行っている。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見逃されることがないように注意を払い、防止に努めている	虐待は職員の無知と、その職員が不満不平を持っているから発生するもので、職員が、心穏やかに安心して働ける体制を作るようにして虐待を防止している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	成年後見制度説明会・三重県福祉セミナーなどに参加。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約時には親族に集まってもらい、十分な説明をしている。 事前に本人が来園見学し、一緒に食事をし、本人の希望を確認している。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	家族とは診療時の付添や、一緒に食事をすることで利用者や家族からの希望を聞き取り、ほとんどの事項を即時実行。 家族との関り(法事・旅行・外出等に職員が同行、車の提供)を積極的に支援	家族が面会時に利用者とは勿論、職員やボランティアと一緒に食事をすることを積極的に作ることで家族の希望を聞く機会を作っている。聞き出した希望はすぐに実行する事としている。	現在は、外出・ケアに重点を置いて利用者・家族の意見が反映されている。今後重度化が進む事に対し、看護知識の習得など、家族の不安につながる病氣・リハビリ対策の考慮が望まれる
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	月2回の役員会を開催している。連絡票などを活用している。代表者は、常にホームに居て、頻りに職員と意見交換を行っている。原則、下位職員の意見を採用し、運営に反映させている。	経験の浅い職員の意見を積極的に採用して職員が自主的に考える体制を作っている。食事づくりや支援では、上司の指示で動くのではなく、利用者の立場に立って、どうすれば良いかを考えて職員が意見を出してあたる様になっている	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	毎年定期昇給。有給休暇の完全取得。昇格。 職員が利用者の人々に心身面で寄り添える体制を作っている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	ケアの方針などについて、職員からの書面での意見聴取も行っている。外部の研修も活用している。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	三重県地域密着型サービス協議会の役員。 阿漕苑・フルハウス・渚園・とのむら等交流。 各種講習会講師として交流。地域ケア交流会の会員。エンドオブライフ(看取り)研究会会員		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	個人の希望を入所前に聞き取り、個別対応している。(通所サービスも活用して、馴染みの関係を作っている) 家族とも食事会などを通じ話し合っている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	家族の希望・本人の希望を徹底的に聞いている。 本人・ケアマネ・家族と事前に話し合っている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	入居決定前に本人が見学に来られ、希望を聞き取ることを原則としている。初期対応時から、本人と家族の希望を叶えることを大切にし、話し合って実現している。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	職員と入居者、また入居者同士での支え合いが当然のように行われている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	行事等では家族も一緒に準備をする。 家族の面会では、一切の制約を加えていない。 食事を一緒にしていただいている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	ふるさと訪問・法事などには職員が同行するなど、家族の個人的な相談にも応じ、レモンの里がコア(核)として機能するようにしている。友人・姉妹・子・孫・ひ孫、その配偶者等多岐にわたって面会に来られる。	家族、親族、友人、近隣の人などが事前連絡無く頻りに訪問されており、気軽に立ち寄り、遊びに来られる雰囲気作りがされている。 馴染みの関係を絶たないよう、ボランティアと共に、帰宅・外出の支援をしている。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	利用者が個人として自由に暮らし制約が少ない。 個人として暮らし続けることによって、逆に散歩・外出などの時に互いに協力・助け合っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	過去7年で7名の方の葬儀をホーム内で執り行った。(手作りの家族葬) 毎年合同慰霊祭を行っている。家族の方は行事にはボランティアとして参画している。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	個人として自由に暮らすことで、本人・家族の希望がスムーズに伝わる。(思い出作りにつながる外出・食事・住環境等)。最終的には自然な形の看取り(生まれた時の姿で死にたい・・・)の実践を誰もが希望している。	日々の暮らしの中で、会話の中で、表情の変化を素早く察知し、本人の希望を即時反映させる体制をとっている。家族は面会時に、利用者は何時でも職員は会話する機会を多くして、職員に遠慮することなく希望を伝える体制が作られている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	介護施設にありがちな施設環境の枠を取り払い、半世紀前には当たり前であった生活様式を基本にしている。(葬儀・段差・食事・施設・火気・刃物・作物など)		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	最小限の身体介護であるためには、最大限の個人把握と環境整備が必要である。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	ケアの重要性を常に研究し、本人・家族・医師などと連携し、意見・計画の即時実行を原則としている。必要と思われる機器は即時設置している。(エアマット・車椅子・ベッド・介護小物等)	利用者の高齢化や重度化により、介護計画を身体介護にもウエイトを置く方向になってきている。本人・医師・看護師・家族・職員がチームとなり常に話し合い、一人ひとりの現状に合わせた介護計画としている。	介護記録を通じてモニタリングが行なわれているようである。全員でのモニタリングの実施、更に詳しいモニタリング記録の作成により、情報の共有となるよう期待する。
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	記録書式は月2回見直しをし、変化に対応した書式としている。 入居者ごとに個別書式としている。 ケアの重点項目が把握しやすく、変化が良くわかるように記入方法を工夫している。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	介護の範疇を超えた生活援助実施。 (旅行・家族との外出、医療等) 自然な形の看取りをするための支援・サービス(普通食・スローフード・自力歩行等)		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	ボランティア多数。 神社・保育園・消防・リージョンプラザ・県文化会館・三重大学とも協力。(AED講習など)		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	本人・家族の希望を入れて、内科・整形など複数の診療機関で受診。内科医に随時往診していただいている。 職員(責任者)が受診に付き添って医師との連携をとっている。 看取りの実践。(8名)	本人及び家族が希望する医療機関を受診している。職員が平素の状態を熟知しているの で、受診時は家族任せにしない。医師と職員が話し合う事が大切との考えから、受診には責任者が必ず付添っている。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	非常勤看護師2名。 過去8名の看取りを行った。 受診には職員が付添い、結果を看護師と共有。 看護師の夜間緊急対応体制をとっている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院時も職員の長時間付添・24時間付添などをおこない、直接医師とも相談し、早期退院が出来た。 入院による認知症進行も防止した。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	(エアベッド・車椅子・ネブライザーその他)吸痰職員研修修了。 過去8年間で、当ホーム内で8名を看取った。 (再掲:食事・自力歩行)(畳の上で死にたい・生まれた時の姿で死んでほしい)	入居当初から本人・家族と話し合い、最終的には看取りまでの方向性を定めている。施設での生活という考えでなく、自宅での生活と同じとなる暮らしを続けることで看取りの成果を上げている。看取り期には家族の最終判断の機会を設け、柔軟な対応をしている。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	職員間で日常的に話し合い、訓練も行っている。 職員の気づきで急変時早期回復が出来た。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	緊急避難用にビニールハウスを設置。 場所・経路も確認している。 正職員4名が500m圏内に居住し、緊急対応体制。 近隣も協力。	自動火災通報装置があり、消防への通報は自動で行われ、居室のベランダ側窓は掃き出し窓で、避難経路ともなる。ガーデンには一時避難場所(ビニールハウス)も確保されている。近隣には常に非常時の協力を仰いでいる。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	基本的には居室での身体介助。 個別介助。自由の保証。 個人として話すときは小声。 大声での話しかけをしないことで、誇りやプライバシーが守られる。	入居者は高齢者ではなく人生の先輩として対応が心がけられている。声掛け時に職員は寄り添い、小声で話しかけている。耳が遠い人でも目を合わせての会話でプライバシーの尊重が図られている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	コンサート、墓参・法事など積極的に出席。 随時外出。（職員・家族・ボランティア同行） 施設用の買い物時にも利用者参加。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	日課を定めていない。 散歩・外出・家族旅行・家族との個別外食・喫茶店・歌・手芸・草取り・ゴミ出しなど仕事や遊びを取り入れている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	大多数が訪問理美容（サナエ美容室）を利用、2名がなじみの店に行っている。 職員が染髪・爪切りなども実施。 面会者や外出の機会が多く、身なりに気をつけている。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	生もの・魚・季節の食材を職員が買い出しに行き、食材にこだわっている。手作り料理。 職員・家族・来客と一緒に食事。 刺身・もち・骨付魚など・・・全員が普通食・・・、ソフト、刻み、ミキサー食にしない	全員が普通食をゆっくり食事するスローフード・スローイートに徹している。食事の初めには職員によるユニークな誤嚥防止体操があり利用者から笑顔が出ている。食材は自然な物に拘り、利用者の好物を採り入れることで食慾を増進している	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	利用者が自分の食べる量を決めている。 良質で食事意欲を高める食事作り。 （固い物・なま物・串物・自家栽培物）		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	食事後洗面所へ誘導し、口腔ケア。 毎週ポリデント。自立度の低下により、毎食・完璧な口腔ケアは難しくなっている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	過去に一時的にはほぼ全員が自立であったが、高齢化・重度化により自立支援にも限界を感じている。	利用者は高齢化、重度化に伴いハビリパンツを使用している人が多くなっているが、職員が一人ひとりの排泄パターンを熟知し、さりげない声掛けでトイレ誘導を行い、尿意・便意をできるだけ失わないようにしている。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	便秘が精神状況の不穏や帰宅願望に繋がることを理解している。 魚・野菜・肉を豊富にした食事をしている。 散歩や日光浴にも取り組んでいる。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	個浴。マンツーマンの入浴。 一人ひとりお湯を替えている。 ゆったりと入浴を楽しんでいた。 (一人当たり45分から1時間) 現実には本人希望の時間帯とは言えない。	入浴順等は無く、個浴で職員とマンツーマンでの入浴で、時間制限をしなく、ゆっくりと職員とも会話し、楽しむ入浴が心がけられている。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	就寝時間・起床時間は自由。 居室内温度は、その日によって外気温とすり合わせて調節している。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	良好な食事と環境整備により減薬している。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	家族旅行・家族との個別外食・喫茶店・買い物・ドライブ・歌・手芸・草取り・ゴミ出しなど仕事や遊びを取り入れている。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	ふるさと訪問を軸として職員が同行しての外出・買い物・家族との外出・ボランティアとの外出・ガーデンの散策・帰宅・宿泊など多様に対処している。(墓参・旅行・祭礼・コンサート)	家族の協力を積極的に仰いで、本人の希望による墓参・ふるさと訪問などは元気や意欲の向上に効果がある。また、職員は勿論、家族が同行する事で思い出作りに繋がっている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	希望により、小額の金銭を持っている。これは特に職員が管理せず、必要に応じ補充している。実際にはこの小銭も使う必要が無く、それで当然として生活されて見えます。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	居室に電話のある方2名。家族・友人に電話している。現実には本人から架電することはなくなっている。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	介護施設らしくない住空間。 風呂脱衣室に強力エアコンを入れ、脱衣時の寒さを防ぐようにした。 生花・観葉植物類が豊富。 プライバシーに配慮したテーブル配置としている。	玄関には古いカメラやミニグラスが無造作に展示され、生花もある。二つ折れの屏風がれ、自然な空気感を作っている。ホールのテーブルは管理者の手作りで木のぬくもりがあり、円形で全員の顔が見えるが適度なついでにより、隣同士のプライバシーが確保できている	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	共用空間にも、プライベートな空間があり、落ち着ける。他の人と離れて過ごせる場所がある。ガーデンにも自由に出られる。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	介護ベッドを使用している人は1名のみ。 居室の全てが個人の好みで家具等を配置。 木製の家具を多用、施設らしくない居室づくり。	自宅の様な木製ベッドで、木製家具が手すり代わりにあって、自宅に居る様な自然な姿で暮らせる工夫がされてる。位牌や家族の写真、なじみの家具などが置かれ、自宅と同じ普通の暮らしになっている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	手すり歩行がしやすく空間認識がしやすい廊下。玄関のスロープを、上がり框にして感覚的に安定させた。その結果、玄関の転倒事故が無くなった。		